



KYOTO  
BUNKYO  
UNIVERSITY



地域連携学生プロジェクト

REACH

2020年3月号 (Vol.1)



REACH

2018年、初夏。

京都文教大学にほど近い向島地域で  
京都ダルクのグループホーム建設反対運動が巻き起こりました。

心理学サークルROADのメンバーであった私と高橋君は  
SNSに投稿された張り紙の写真や紛糾する説明会  
そして私たちの大学が掲げる  
地域共生社会について議論を交わしました。

それから半年間の準備期間を経てスタートしたのが  
地域連携学生プロジェクトREACHです。

知識の中に生の人間はいません。  
大学の外へ出て、地域で暮らすひとりひとりのところへ  
私たちはREACHする。

そこで得た経験を、また別のひとりひとりに発信していく。  
それがREACHという団体名に込められた意味です。

不器用で手探りでも、この一年間の活動は  
本当に血の通った、生きたものでした。

本誌を手にとってくださってありがとうございます。  
たくさんのお会いを、ぜひ覗いてみてください。



REACH共同代表 中村詩帆

# MENU

0 1 はじめに

0 2 目次

0 3 REACHについて（メンバー紹介）

0 4 REACH 2019年度のあゆみ

0 5 REACH×FeeRing ブラインドカフェ

0 7 REACH×京都ダルク

0 9 対談 太田実男×高橋直人

（京都ダルク施設長）

（REACH共同代表）

1 2 宇治川福祉の園レクリエーション

1 4 おわりに



## ◆◆ REACHという企て

2017年に改定された「京都文教大学の三つの方針」では、本学の教育目標を「ともいき人材の養成」と定めています。「ともいき」とは、建学の理念である「四弘誓願」を現代的に言い換えた語であり、「自己と他者との生かし合い」の精神を指します。「自他共に幸せを感じられる社会」（＝ともいき社会）は、人類が目指すべき「理想的な社会」のひとつのかたちと言えるかもしれません。

しかし、現実はどうでしょうか。排他的な言説と冷笑的な空気が充満し、人々は分断されている。このような社会に対し、私たちに何ができるのでしょうか。何をすべきでしょうか。そんな問いの中で生まれたのがREACHです。

大学を足場に、対話と共生が可能な地域と社会のあり方を考える。本誌は、そんなREACHの取り組みの一部を紹介するものです。

REACH共同代表 高橋直人 ◆◆



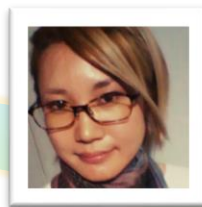
大熊真司  
教育福祉心理学科 3回



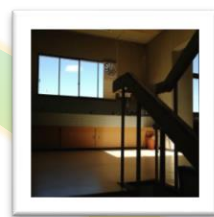
高橋直人  
臨床心理学科 3回  
REACH共同代表



竹松慧美  
臨床心理学科 1回



中村詩帆  
臨床心理学科 5回  
REACH共同代表



狐野悠花  
臨床心理学科 5回



いち  
臨床心理学部所属



仲村勇輝  
臨床心理学科 1回



辻村瑛麻  
臨床心理学科 5回



三島彩夏  
臨床心理学科 4回



村上翔太郎  
臨床心理学科 1回

# 2019年度 REACHメンバー

# 地域連携学生プロジェクト

## REACH

### 2019年度のあゆみ

#### 5月

- ・地域連携学生プロジェクト採択選考会▶
- ・リカバリーパレードin京都
- ・地域連携学生プロジェクト採択決定
- ・心理学コミュニティROAD内での勉強会実施



#### 7月

- ・京都ダルク出張フォーラムin長岡京市
- ・加藤武士氏（木津川ダルク代表）講演会「間違いだらけの薬物依存とその解決に向けて」参加
- ・京都ダルク訪問&アクセサリー作り説明会
- ・オープンキャンパスブース出展

#### 9月

- ・akakilike×京都ダルク 東京公演 舞台鑑賞
- ・取材 京都新聞（ブラインドカフェ情報）
- ・REACH×FeeRing ブラインドカフェ開催
- ・京都ダルクの皆さんとアクセサリー作り
- ・宇治川福祉の園レクリエーション
- ・向島元気バザール出店
- ・「ニューズレターともいき Vol.17」掲載
- ・京都ダルクグループホーム建設説明会

#### 11月

▶本学学園祭「指月祭」で、コーヒー・ココア・ハンドメイドアクセサリーを販売しているようす

- ・指月祭出店
- ・京都ダルク16周年記念フォーラム
- ・京都ダルクの皆さんとアクセサリー作り
- ・宇治川福祉の園 わくわくまつりボランティア
- ・活動報告会「REACHって何やってるん？」開催
- ・「ここがダメだよ京都大学」（研修）



▲活動報告会「REACHって何やってるん？」のようす



▲トークセッション。左から松田美枝先生、中村、竹松、高橋

#### 6月

- ・『女性の依存症者の回復』研修参加
- ・向島元気バザール&脱力系フェスタ出店
- ・松田美枝ゼミと京都ダルク研修
- ・NA※オープンミーティング見学
- ・宇治川福祉の園レクリエーション



- ・『Think!生きづらさ 依存症からの「回復」を見つめる』研修
- ・チャリティーブランド JAMMINさん見学
- ・懇親会inキトゥンカンパニー

▲弱視・白濁ゴーグルやアイマスクを用いたFeeRingの皆さんとのブラインドお茶会

#### 8月

- ・akakilike×京都ダルク 京都公演 舞台鑑賞
- ・オープンキャンパスブース出展×2
- ・NAオープンミーティング見学
- ・京都ダルクの皆さんとアクセサリー作り×2



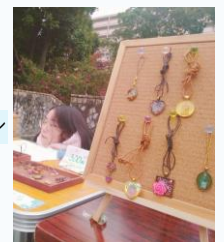
▲オープンキャンパス REACHブースのようす

#### 10月

- ・AIDS文化フォーラムin京都（ブース出展）
- ・「地域入門」にて活動報告
- ・宇治橋通りわんさかフェスタ（出店）

#### 12月

- ・NAオープンミーティング見学
- ・宇治川福祉の園レクリエーション
- ・ともいきフェスティバル出店
- ・『ぶんきょうサテキャン情報 Spiral Up』掲載
- ・向島元気バザール出店
- ・京都ダルクでお餅つきに参加



▲12月の元気バザールのようす

#### 1月

- ・京都ダルクの皆さんとアクセサリー作り

#### 2月

- ・NPO法人京都マック見学
- ・京都ダルクの皆さんとアクセサリー作り

※NA（ナルコティクスアノニマス）：薬物依存からの回復を目指す当事者（ドラッグアディクト）の国際的かつ地域に根ざした集まり。

# REACH × FeerRing ブラインド カフェ

本学には、視覚障がいに関する啓発活動をおこなっている FeerRing（フィーリング）というサークルがあります。REACH メンバーで、FeerRingの代表も経験したロービジョン※当事者の三島さんが中心となり、2019年9月には京都・五条烏丸にあるカフェ「キトゥンカンパニー」さんにて、REACHとFeerRingのコラボイベントとして「ブラインドカフェ」を開催しました。

ブラインドカフェとは...

実際のカフェをお借りして、「椅子に座ったり」「メニューを読んだり」「飲み物を飲んだり」といった何気ない動作を、アイマスクや弱視ゴーグルを使いながらやってみることで、当事者と同じような体験をしてみようという試みです。

ブラインドカフェにご参加いただき、実際に色々体験してもらうことが、自然な声掛けや手引きにつながればいいと思います。私もハードルを感じすぎているかもしれないので、イベントを通して、お互いに気づきがあればうれしいです。（三島）



## 当日ご参加いただいた方から

若い方が、いろいろな機器を使いながら工夫して楽しく生活されている様子わかりました。当事者の方などのお話がきけたことがよかったです。大学生ならではの若い感性で活動されていることがいいなと思いました。楽しみながら視覚のことがよくわかりました。

弱視の体験をして、一人で外出するとしたら怖いと感じました。また、明るさの感じ方の違いと、いつも使っているiPadやスマートフォンに、自分が知らないだけで、役に立つ機能がそなわっていることにも驚きました。注文の際、メニュー表を読みあげてもらえると理解できるので助かるけど、聞いたものを覚えつつ決めないといけないことが難しかったです。それと、食事が運ばれたときに、いつもは大体食べ物の見た目です「美味しそう」という感想が出るのに対し、一番に香りを感じて「いいにおいだな」という感想が出たことにも驚きました。

## イベントを終えて

FeerRingの方々と打ち合わせを重ね、自分も体験をすることで、外からでは分からなかったことを知ることができました。イベントを通じ、様々な人が感じたことを共有することで、新しい気づきもあり、それが自身の学びにもつながるとても有意義な時間でした。（村上）

FeerRing 木村漱之介さん



来てくださった方に体験してもらうだけでなく、いろいろな話を聞くことができていい経験になりました。



キトゥンカンパニー オーナー 岩井穂積さん

ブラインドカフェを開催していただいて思ったのは、人と人が助け合うことができれば多少のバリアがあってもなんとかなりますよね！ということ。そのことを実感できたのは関係してくださったみなさんのおかげです。ありがとうございました。

「見えにくい」や「見えない」という体験は、視覚以外の感覚を鋭くするきっかけになると思います。その体験をすることで今までとは違った視点を得ることができますので、またどこかでブラインドカフェが開催される時はぜひ参加してみてください！

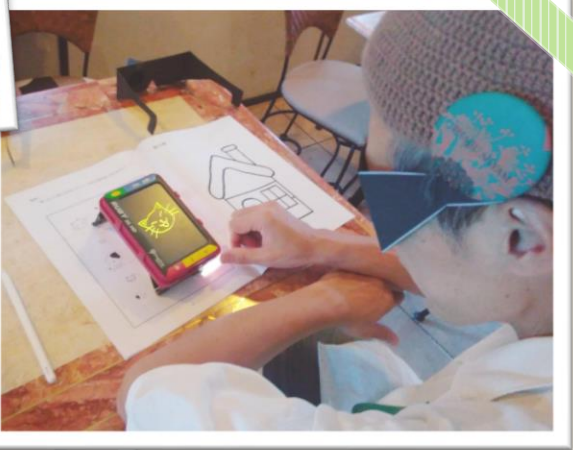
※ロービジョン（low vision）：病気、怪我等のために、視機能（視力や視野など）が低下した状態。国際的な定義はなく単に失明と区別する場合や、弱視や視覚障害と同義で用いられることもある。

当日のようす



▲キトゥンカンパニーさん

◀当日お越しくださったお客さんにiPadを使って説明する三島さん



▲オーナーの岩井さんも興味津々です

▼「サンドイッチの中身がこぼれないかちょっと心配...」



▼これ、実は時計なんです



▲当日使用したゴーグル（中央）と接客中の三島さん（左）



▲ねこのイラストをつかって「見えやすさ」の違いをチェック



# REACH X 京都 DARC



REACHは薬物依存症の回復支援施設である〈京都ダルク〉の皆さんと、アクセサリーの制作や、地域のバザーへの共同出店などをおこなっています。

一緒にアクセサリーを作ったり、作品を地域のバザーなどで販売することで、いろいろな人が自身の立場を超えて「つながる」きっかけになればと、2019年9月から共同制作をはじめました。(中村・高橋)

▲UVレジンとは...  
UVライトを当てると硬化する透明な樹脂のことで、手軽に可愛いアクセサリーを作ることができます。

## アクセサリー作りにご参加いただいたみなさんの声

今までやったことがなかったから楽しかったです

いつでもウェルカムです

今までやったことがなかったけれど、やりだしたら楽しくやれるようになった

アクセサリー作りを普段することがないので新鮮でした  
若いエネルギーを貰いました



上手に作れなかったです

あまり話ができませんでした

参加できてよかったです

学生さんが一生懸命かかわってくれようとする気持ちが嬉しかった



交流は大切だと思います  
またやりたいです  
今のペースなら大歓迎

色々と僕自身が考えたようにやれたし、今後は楽しみです

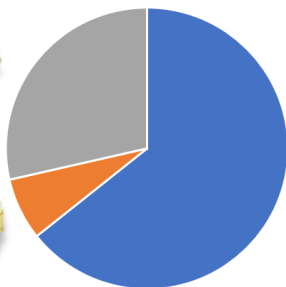
やってみたら集中できて面白かった  
丁寧に教えてくれてよかった

## 制作に参加したREACHメンバーの声

ダルクのみなさんと初めてアクセサリー作りをした時、最初に選ばれた色は...ピンク！素敵なギャップに驚きました。現場はいつも「扇子のデザインだけにセンスがいい」などおやじギャグが飛び交う、和気あいあいとした雰囲気です。(竹松)

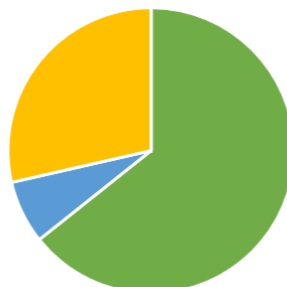
今だからいえることですが、アクセサリー作りがこんなに続くとは正直思ってなかったです(笑)。今後も僕らなりのペースで続けられたらいいなと思っています。(高橋)

アクセサリー作りはいかがでしたか？



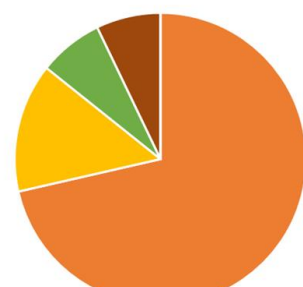
■満足 ■やや満足 ■どちらでもない ■やや不満 ■不満

REACHとの交流はいかがでしたか？



■満足 ■やや満足 ■どちらでもない ■やや不満 ■不満

今後も交流を続けたいですか？



■そう思う ■ややそう思う ■どちらでもない ■あまりそう思わない ■そう思わない

※上記表は、アクセサリー作りにご参加いただいた京都ダルクの皆様に対し、2019年9月に実施した無記名アンケート(回答数14)の結果を基に作成しています。  
※本誌に掲載されているレジンアクセサリーの写真は、すべて京都ダルクの皆様とREACHが共同で制作したものです。





▲3ヶ月に一度、向島中央公園にて開催される「向島元気バザール」のようす。写真は（右・中央）6月と（左）9月。私たちの隣では京都ダルクのみなさんがフランクフルトを販売しています



▲10月に開催された「宇治橋通りわんさかフェスタ」のようす。アクセサリー作りのワークショップは、地域のお子さんたちに大人気でした（右）「宇宙」をモチーフにした貝殻のアクセサリー。素敵ですよ（左）

▲指月祭。ダルクのみなさんも遊びに来てくれました。写真はスタッフの太田さん（左端）加藤さん（右端）

写真でご紹介したほかにも、2019年度はたくさんのイベント・バザーなどに出品する機会をいただきました。中には「ダルクのこと応援していますよ」とか「他にはどんな活動をされているんですか」などと声をかけてくださる方も。私たちにとっても、地域の方々と直接言葉のやり取りができる貴重な場だと思っています。（高橋）

REACHでは、アクセサリー作りなどの交流と並行して、当事者や専門家のお話をうかがう機会も大切にしていきたいと考えています。多くの皆様のご協力のもと、今年度は、NA（ナルコティクス・アノニマス）のオープニングをはじめ、各種フォーラムやシンポジウムなどにも参加することができました。研修を通じて、REACHの1回生メンバーは何を感じ、考えたのでしょうか。

## 《 研修に参加してみても... 》

研修では、人が薬物に頼りだすきっかけとして、人間関係のもつれや自尊心が低いこと、仲間として認められるためということがあるということを知りました。その事を知るまでは、なぜ薬物を始めるのか理解できていませんでしたし、薬物依存は私とは無縁なものだと思っていました。しかし研修で当事者の方が話す内容からそれぞれの事情を汲み取ることができ、依存症に無縁だと言い切れる人はいないのではないかと考えるようになりました。

研修や交流を通し、実際に依存症の方々として接してみて、これまで自分に間違った印象が染みついていたことに気づき、ギャップに驚きました。「薬物依存＝幻覚に苛まれている」という勝手なイメージを持っていましたが、そのようなことはなく、回復に向かおうとして色々なことを考えておられる一人ひとりの人間であるということ強く感じました。現場に行ってみることで、無知だったことが原因で勝手に定着させていた自分の中のイメージを砕くことができるように思います。また、研修に参加することで新たな視野が広がっていき、それが活動のやりがいにつながっています。（竹松）



▲2019年11月「京都ダルク16周年記念フォーラム」のようす

研修に参加してみて、いかに自分自身が薬物依存症やその当事者に対して、偏見をもっていたかを思い知らされました。特に、京都ダルクや京都マックを見学させていただいて感じたのは、どちらもとてもアットホームな雰囲気であり、仲間という言葉が大切にされていることです。そして、それぞれの歩幅で回復の道を歩んでおられることも印象的でした。REACHに入ったことで、差別や偏見を少しでも無くし、その上で私たちが実際に取り組んでる活動や雰囲気を少しでも分かりやすく地域の方々に伝えたいと思いました。（仲村）

高橋…今日はよろしくお願ひいたします。

太田…よろしくお願ひします。

高橋…まず、そもそもこの冊子を手に取っていただいた方の中には、ダルクのことをほとんど知らない方もいらっしゃると思います。また、私たちが所属している臨床心理学部の学生からも、ダルクが薬物依存症の回復支援施設であることは知っていても、それ以上のこととはわよくからないといった声も聞かれます。そのためお伺いしますが、ダルクにはどのような方がおられるのでしょうか？

太田…ダルクにいるのは主に、薬物依存症・アルコール依存症の人で、特に、薬物やアルコールを辞めたいと思ってる人たちが集まる場所です。

高橋…そうなんですね。具体的には、どんな取り組みをされているのでしょうか。

太田…まず、午前と午後グループミーティングがあります。ミーティングでは、かつての自分と振り返ってもらうことと、ダルクへ来て自分はどうなるか、どう変わっていくのか、どんな人間になっていきたいのかということをお話します。人の話を聞いたり、見たりする中で自分にフィードバックしていき、自分と照らし合わせるということが大切になります。

高橋…私たちも何度かグループミーティングを見学させていただきました。



▲お話を伺ったデイセンター・マハロ

が、ご自身の経験やおられる姿が非常に印象的でした。その他はいかがでしょうか？

太田…例えば、調理実習プログラムでは、集団でひとつの事をやることになりま。その中でサボる人がいたり、その一方で一生懸命頑張る人がいたりとか。そうなる時、サボりがちな人は時に怒られるわけだけども、怒っている側の人間というのはい、だいたい頑張り過ぎていてる人なんです。いづれにしても、バランスが悪いからそういうことになる。やる人間は、やらない人間に頭がきていて、やらない人間は甘い汁だけ吸うみたいな。

そんな中でトラブルがあったりとか、ちょっとした問題が起きて、自分がどんな振舞いをしていいかというのを感じてもらおうということが重要になってきますね。

高橋…なるほど。集団での取り組みが、自分自身を振り返る契機となるわけですね。ボランティア活動などにも精神的に取り組まれている印象があります。

太田…そうですね。ボランティアや農作業の就労体験などもやっています。例えば、(施設の)前の公園の掃除なんかもボランティアでやっているわけですが、時折地域の方から「もっと活動をアピールしろ」というようなことを言われることがあるんです。



▲このプレートを見ると「ダルクに来たな～」という気持ちになります

でも、私たちの活動というのは、誰かに何かを認めてもらいたくてやっているわけではないんですよ。認められるためにやるとか、何か目的があるとかそういうことではなくて、自分たちが「人生をやり直していく」という回復過程の中で、自分たちで自分たちの住んでいるところをきれいにしていこうという、ただそれだけのことなんです。

というの、回復自体がそういうもの。誰かに許されたいために人生をやり直すわけではない、自分の人生を振り返った時に、これからは良くないと思った時に始まるもので、主体は「自分」なんです。

だって、「誰かに認められること」を目的として活動していたら、いつか終わりが来るかもしれないでしょ。認められることで満足してしまったり、反対に誰からも認められなかったとしたら、やっつけられないと思う。「回復していく」というのは、「誰か」ではなく、自分自身が成長していく、成長し続けていくことなんです。だからダルクにおけるボランティアや就労体験もそういう位置づけになりますね。

### 地域との関係

高橋…私たちはこの一年間「地域」連携学生プロジェクトREACHとして活動してきて、京都ダルクさんとは「地域パートナー」という関係になるわけですが、太田さんは、「ダルクと地域」の関係性をどのように考えておられますか。個人的には、地域とのつながりや交流を大切にされているイメージがあります。

太田…そうですね。少し語弊があるかもしれませんが、地域とのつながりを大切にしている、というよりは「縁」の話だと思っています。

例えば、高橋君や文教の学生さんにも「僕たちの取り組みを是非見てください」と呼びかけたわけではなくて、ひよんなことから知り合ったでしょ？

高橋…そうですね。ひよんなことから(笑)

特定非営利活動法人  
京都ダルク 施設長

## 対談 太田実男 ×

## 高橋直人

地域連携学生プロジェクト  
REACH 共同代表



▲太田さん(左)・高橋(右)

**太田**…そうそう(笑)。そういう、ひよんなことから知り合って、その関係を大事にして、ということだと思っけています。さっき言ったように「地域の人たちに何かを認められたい」とかそういうことでは全然なくて、偶然かもしれない出会いの中から、「よかつたら何か一緒にやりませんか？」という話になって生まれ関係ですよね。

そういう意味では「地域との関係」というよりは「人との出会い」を大切にしているという感じですが別に「地域」は限定されてないかな。

**高橋**…なるほど。特段「地域」にフォーカスした「アピール」というよりは、より広く「人との出会い」や「縁」を大切にされているわけですね。

**太田**…そういうことですね。でもそれって、ダルクの特徴というよりは、本来の「人間らしさ」というものなんじゃないかな。

## 向島のハコ

**高橋**…一昨年(二〇一八年)から続く、京都ダルクのグループホーム移設への「反対運動」は、京都文教大学の最寄駅であり、私も毎日利用している近鉄向島駅の周辺から始まりました。

大学から程近いグループホームの建設予定地付近には「建設断固反対」のプラが大量に貼られていて、通学していれば嫌でも目に入るんです。

私たちが所属する臨床心理学の授業では、依存症の回復過程における自助グループやダルクの重要性が強調されるわけですが、大学から一步外に出るとそのような価値観とは相容れない光景が広がっているという状況に、当時はなんとも言えない「違和感」を覚えました。

## 対談 太田実男×高橋直人

私たちの場合、この「違和感」を共有・言語化するプロセスの中でプロジェクトの構想が生まれ、やがてREACHが発足するわけですが、太田さんは向島での出来事をどのようになら考えておられるのでしょうか。

**太田**…そうですね。簡単に経緯を説明

すると、現在の(グループ)ホームが古くなってきて新しい物件を探していたのですが、やっぱりなかなか貸してもらえなくて、だったら「買うてまうか」と。それだったら文句を言われなくて済むだろうというのがそもそもの始まりです。ところが、反対の声があがった…なんでなんですかね(苦笑)

**高橋**…うーん…何というか…

**太田**…まあでも、結局あれがきっかけで高橋君たちとも出会ったわけだし。

**高橋**…そうですね。あの件がなければ、ここでこうやってお話することもなかったかもしれません。

**太田**…そうそう。すべてはそういうことですよ。ある意味では「追い風」というふうに捉えています。

## 社会とのつながり

**高橋**…特に昨年から今年にかけて、京都ダルクのグループホーム移設に関する報道を新聞やテレビで目にするのが多くなってきたように思います。

以前テレビ取材について太田さんとお話した際に、「本当はテレビになんて出たくないし、ダルクの件だけなら取材に応じることもなかったかもしれないけれど、当時は南青山の児童相談所の件も話題になっていて、そういうニュースを見聞きしていたこともあって、

やはり声をあげなければいけないと思った」とおっしゃっていたのが印象に残っています。

**太田**…そうですね。つい先日、伏見区に開設するはずだった救護施設の計画が断念されたことがありましたよね。そのような「社会の状況」そのものを考えていけないといけないと思っています。うーん…どうなんやろ。なんか高橋君考えてよ(笑)

**高橋**…僕ですか!!(笑)。僕も色々考えているんですけどね…

**太田**…しかし、日本人ってデモとかやらないもんね。

**高橋**…そうですね。個人的には常々やりたいとは思ってますが(笑)

**太田**…僕は学歴も教養もあるわけじゃないからよくわからないんだけど、でもやっぱり、国民がちよっと流されているような気がする。

**高橋**…そうですね。特にここ数年は、ちよっとおかしな方向に国が傾いているような感覚があります。

**太田**…ちよっと前の話になるけど、例えば年金の問題とかだって、あれでいいの?

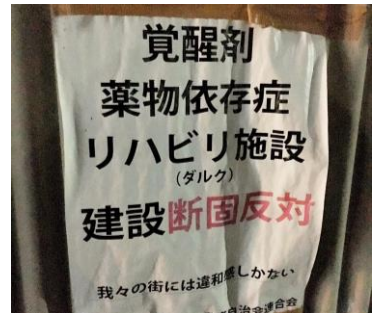
**高橋**…うーん…あまり詳しくはないですが、依然として根本的な解決には至っていませんよ。

**太田**…でも、何も行動を起こさなければ、結局現状を認めることになるわけですよ。この話に限ったことではないけれど、誰かが声をあげなければいけないと思うんです。だって、「こんなんでええの?」ってことあるでしょ?

**高橋**…ありますね。たくさんあります。

**太田**…だから誘って欲しいというか…言ってくればデモとかするよ(笑)

**高橋**…本当ですか!?! それは嬉しい…!?! というか心強いです。他方で、「こんなんでええの?」と思っけていても、中々声をあげられない学生も多いように思いま



▲通学ルートに今なお残る張り紙

## 「薬物乱用防止教育」について

す。自治が空洞化し、学生の自由が大幅に制限される中で、大学という空間そのものが大きく変質してしまつたことも無関係ではないでしょう。それを言い訳にはしたくないですが、やはり進学や就職を考える中々シビアなところもあります。それとは別に「デモなんて無駄だ」という学生も少なくないでしょうが。

**太田**…それは国民全体にも言えることだよな。

**高橋**…そうですね。少し大きな話になりますが、社会全体の意識が変わってこないよ…

**太田**…うん。変えていかないとだめだよな。ダルクのことはいいとしても、さっき話した救護施設の件なんて、「救護」ですよ…なんというか、自分勝手な人が増えてるよね。

**高橋**…そうですね。それに加えて、社会全体の「余裕の無さ」のようなものも感じます。この社会に足りないものは一体何なのでしょう。太田さんは、どんな社会が望ましいと思いますか？

**太田**…どうなんやろ…やっぱり色々なことが許される社会…という感じがかな。あるいは、多文化の交流とか…それこそ向島の団地の取り組みなんかはすごいじゃないですか。

**高橋**…そうですね。たくさん学ぶことがあると思いません。

**太田**…でもやっぱり、一人ひとりの意識が変わらないことには中々難しいと思う。例えば精神病院や精神疾患だつて、少し前までは苛烈な差別にさらされてきたけれど、そういう風潮と、過去の政策や国の判断は無関係ではないでしょ。そういう意味では、行政が方針を転換するだけでは不十分だと思います。

やはり国民に対してきちんと周知をしないと。ダルクだつて法令に則つて運営されているけれど、現実にはあのような反対運動が起きてしまうわけで。国が過去に誤つた対応をしていたならば、間違つていましたときちんと認めないと。二〇一六年には「障害者」差別解消法が施行され、あるいは京都市には「障害者保険福祉推進室」もあるけれど、それらが十分に機能しているとは到底言い難い状況にあると思います。

## 対談 太田実男×高橋直人

**高橋**…グループホームの件だけでなく、例えば芸能人の薬物使用に関する過剰とも言える世間の反応などを見てみると、いわゆる「薬物乱用防止教育」というものが、強くて感じるのですが、この点についてはいかがでしょうか。もちろん、メリットとデメリットがあるとは思いますが。

**太田**…確かに難しい問題だとは思いますが。バランスの問題ではないでしょうか。ただ啓発にしても、やや極端な面はあると思います。例えば、段階を無視して、「薬物を使つたら廃人になる」と言われても「いや、なつてないし」という感じ。あるいは「社会生活を送るのが困難になる」というけれど、「社会」が「困難」に追い込んでいくという側面もあるわけだし、だとしたら「社会が廃人になっている」という言い方もできる。

例えばお酒を飲んで、そのコントロールが効かなくなつた人が悲惨な結果になることはあるかもしれないけれど、だからって、お酒を飲む人全員が「廃人」になるわけではないでしょ？薬物についても同じことが言えるのではないのでしょうか。

## 学生へ

**高橋**…この広報誌は、学生にも是非読んでもらいたいと思つて制作しているのですが、太田さんから学生に何かメッセージなどはありますか。

**太田**…やっぱりこれからの社会を変えていく人たちが欲しいと思つて。選挙の時なんかでも若い人には頑張つて欲しいと思つていて、でも長いものに巻かれてしまつたり、大きな力には勝てないことが多い。だから、束になるしかないよね。若い力が団結して。

**高橋**…そうですね。そういう意味では、仲間がいることの強みをここに来るといつも感じます。私自身いくつかの精神疾患を抱えていて、同時に今の社会にはい

くつかの理由で生きづらさを感じています。ダルクに来るとほつとするし、学ぶことも多いです。一方で、そういう回復の場に私たちが入っていくことを、皆さんはどう思われているんだらうと悩む

こともあります。やや語弊のある言い方かもしれませんが、私たちが何かを「学ぶ」ために、皆さんの回復の場を利用してしまつてはいるのではないかと…

**太田**…そうですね。利害のなかでかわらうと考えると、自分はその人たちとかかわつてみたい」という動機で交流する分にはそういう方向にはならないと思

それと、「実は私はこういう問題を抱えているんです」ということを、ここに居る人たちのなかで語っていくことも大事なんじゃないかな。やり取りの中で「ああそうなんだ」と、つまり、単に勉強のために来ているのではなくて、人と人のかかわり、目的としてここに来ているんだということが伝われば、それは全然問題にはならないんじゃないかな。

**高橋**…そう言つていただけると嬉しいですね。ちなみに、ダルクの皆さんとは月一回のペースでアクセスサリィ作りの交流をおこなつてきましたが、このアクセスサリィ作りについて太田さんはどういふうに感じておられますか？

**太田**…まあ、楽しいって言っている人がいてるんで、「ああ、楽しいんや」と(笑)

**高橋**…この機会に太田さんも一緒にどうですか？(笑)

**太田**…やらない(笑)

**高橋**…そうですね(笑)

本日はお忙しいところありがとうございます。今後ともよろしくお願ひします。



▲2019年5月「第2回リカバリー・パレード京都」に参加したときのようす

# 宇治川福祉の園レクリエーション

## 6月レクリエーション

梅雨をテーマに、あじさいをイメージしたパンケーキと、作り手の個性があらわれる可愛いてるてる坊主を作りました。

### パンケーキづくり



▲ 鮮やかなあじさいをモチーフに、ブルーベリーシロップとホイップクリームでパンケーキを彩りました

▶ ちゃんと厚みのあるパンケーキが上手に焼けました！



### てるてる坊主づくり

ふわふわの綿を詰めて作ったてるてる坊主に、ペンで好きな顔や模様を描きました。

▶ 水玉の布で作った梅雨も明るく乗り切れるてるてる坊主



## 12月レクリエーション

12月はクリスマスの企画としてみんなでブッシュドノエルを作りました。

ちなみにブッシュドノエルとは、クリスマスに作られる、木を模したケーキのことです。

材料を分けたり

チョコレートを湯煎で溶かしたり

クリームを泡立てたり

多くの共同作業をこなして美味しいケーキを作っていました。



◀ 表面にフォークで線を付けたり、周りにきのこのこの山を飾って切り株っぽく工夫！

▶ クリスマスのイラストが描かれたぬり絵も塗っていただきました。そして、ケーキに刺して飾るピックとして利用しました！



## 〈まりも〉から〈REACH〉へ

本学には、大学から程近い福祉施設〈社会福祉法人 山城福祉会 宇治川福祉の園〉で長年ボランティア活動をおこなってきた〈ボランティアサークル まりも〉という団体があります。今年度からはその活動をREACHが引き継ぎ、同施設におけるレクリエーションの企画・運営を年3回のペースでおこなっています。

決して頻度は高くはないですが、同じ時間を共有し、同じテーブルで食事を楽しみ、同じことで笑い合うという草の根の交流が、これまで続いてきたこと、そして今後も続くであろうということは、それ自身が、この社会に対する「私たち」なりの積極的な姿勢だと言えるかもしれません。

一緒に演奏を聴いたり、みんなでクリスマスケーキを作ったり...そんなささやかなイベントが、お互いにとって少しでも幸せな時間になることを願って日々活動しています。(高橋)

# 9月のレクリエーション

「音楽の秋」には、マラカスづくりと民族音楽の演奏会をおこないました



◀レクリエーション当日に実際に作ったマラカス

ペットボトルやプラスチックカップに、カラフルな砂を入れ、マスキングテープやぬり絵を貼ってオリジナルマラカスを作りました。

演奏会では、京都文教大学の民族音楽クラブ「民音之会（たみおとのかい）」のみなさんにご協力いただき、アイルランド（アイリッシュ）音楽と、南米のフォルクローレ音楽を楽しく紹介をしていただきました。

「ジョン・ライアンズ・ポルカ」という曲では、みんなで輪になって踊りながら音楽を楽しみました。

## 民音之会のメンバーより

椅子を円形にセッティングしたことで、皆さんの様子が見えて、広々とダンスや交流ができてよかったです。演奏中も、マラカスをたくさ振ってもらえて、一緒に盛り上がり楽しめたと思います。

マラカス作りからの参加型演奏会ということで、利用者さんの楽しさが増しているように感じたので、素敵なコラボが実現できていたと思います。

音楽を耳で聞いて貰って喜んで貰えたのが凄く嬉しかったです。演奏とは自分自身のためだけでなく聴いてくださる人のためにもあるものだ改めて思いました。



マラカスを振ったり、ダンスをすることで、利用者さんも参加できるという形で全員が楽しんでできたのではないかと思います。貴重な経験になりました、ありがとうございました。

## レクリエーションをやってみて

障がいに関する知識はほとんどありませんが、ボランティアに参加しています。最初は上手く立ち回れるかがとても不安でしたし、実際レクリエーション中に失敗してしまうこともありました。それでも、職員の方が優しくフォローやアドバイスを下さるため、安心してボランティアに取り組むことができます。

12月に企画した「ブッシュドノエル作り」では、チョコレートクリームを作るのが難しく手こずってしまいました。ですが、苦戦しながらもみんなで楽しみながら笑ってケーキを作れたことが印象に残っています。今までは、上手く出来るかという尺度で物事を考えていましたが、順調にいかなくても過程を楽しみながらできることが一番良い結果なのではないかと思うようになりました。（竹松）

## ◆◆ アドバイザー教員より

共同代表のお二人とは、彼らが所属する心理学サークルの自主勉強会でアディクションの問題を取り上げる時に呼んでもらったり、私がコーディネートする公開講座に参加してくれたり、元々双方向のやり取りがありました。そのような中で、彼らが地域連携学生プロジェクトを立ち上げることになり、アドバイザー教員になって欲しいと言われたので、二つ返事で引き受けました。学生生活の中で何かやりたいとくすぶっていた彼らですので、REACHの活動を始めたことで、文教での生活や授業などに対するモチベーションが一般的に上がったように思います。

REACHの活動の魅力は、草の根的にいろいろな立場の方々とつながっていくところかと思えます。薬物依存、視覚障がい、知的障がい、その他の困難を抱える多様な方々と日常的な交流を行う中で、大人たちが張り巡らせている心のバリア(障壁)を越えて相互理解を深めていく、先進的で理想的な形だと思えます。ある精神障がい当事者の方から「彼らはこの活動をすることで単位が下りるんですか？ それとも資格が取れるんですか？」と聞かれたので「どちらもありません」とお答えすると「それはすごい！意識高い系ですね！」と感動されていました(笑)。本当にすごいと思っています。

京都文教大学 臨床心理学部 ◆◆  
臨床心理学科准教授 松田美枝

## メンバー 募集中

REACHでは随時新メンバーを募集しています。関心のある取り組みがひとつでもあれば、一部の活動から参加することもできます。各々が出来る範囲で無理せず活動していけたらと思っています。所属・年齢などは一切問いません。

発足して間もないプロジェクトですので、現在の取り組みに加え、少しずつ活動の幅を広げていくことも検討しています。私たちと一緒に、新しい地域のカタチを考えてみませんか？ REACHメンバーは、あなたと一緒に活動できることを楽しみにしています。



Twitter : @KBU\_REACH



E-mail : reach2019@stu.kbu.ac.jp

お気軽にお問い合わせください

## 編集後記

プロジェクトの採択から約一年、広報誌の編集を通してこれまでの取り組みをあらためて振り返ってみると、やはり感慨深いものがあります。活動は文字通り手探りの連続で、反省点や課題も少なくありません。とはいえ、ここまで何とか歩んでこられたのは、ひとえに、私たちREACHの活動を温かく見守ってくださった皆様のおかげです。

プロジェクト発足時にREACHとの連携を快諾していただき、この一年間様々なご協力をしていただいた特定非営利活動法人京都ダルクの皆様、ならびに社会福祉法人山城福祉会宇治川福祉の園の皆様にあらためて感謝申し上げます。

また、ブラインドカフェの趣旨にご賛同いただき、開催を後押ししていただいたキトゥンカンパニーの岩井様、アドバイザーを快く引き受けてくださった、いつも温かく見守ってくださる松田美枝先生、イベントを一緒につくってくれたFeeling、民音之会の皆さん、研修を受け入れてくださった研修先の皆様、プロジェクトの採択にかかわっておられる審査員の皆様をはじめとした京都文教大学地域連携学生プロジェクト関係者の皆様、私たちの活動を全面的にサポートしてくださっている京都文教大学フィールドリサーチオフィスの皆様、江崎さん、そして、この一年間REACHの活動にかかわってくださったすべての皆様にあらためて感謝申し上げます。

今後ともREACHをよろしく願います。

(高橋・竹松)



E-mail : [reach2019@stu.kbu.ac.jp](mailto:reach2019@stu.kbu.ac.jp)

Twitter : @KBU\_REACH

地域連携学生プロジェクト 事務局

京都文教大学・短期大学 社会連携部 フィールドリサーチオフィス

TEL : 0774-25-2630 (平日 9:00~19:00)